

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2019年度研究【経過】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名					
	異文化コミュニケーション学部・教授		細井尚子 印					
研究課題	「東アジア文化圏」研究基盤の構築—娯楽市場における「大衆」「演劇」「大衆演劇」から—							
研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2020年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名					
	立教大・学異文化コミュニケーション学部・教授		細井尚子					
	明治大学・文学部・兼任講師		中野正昭					
	神戸学院大学・グローバルコミュニケーション学部・准教授		森平崇文					
	早稲田大学・講師（任期付）		宮信明					
	大阪大学大学院・文学研究科・准教授		輪島裕介					
研究期間	2018年度 ～ 2020年度							
研究経費※ (上段：支出金額)	2018年度		2019年度		2020年度		総計	
	1,275,000	円	1,807,865	円	0,000,000	円	3,082,865	円
(下段：採択金額)	1,275,000		1,810,000		2,385,000		5,470,000	

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクト研究は、「東アジア文化圏」研究基盤の構築を目的とする。中華文化の影響を自己の基層に内包する「東アジア文化圏」は地理的には非西洋だが、19世紀に「西洋」と向かい合い、20世紀には「近代日本」の空間に覆われた時間を共有した。「西洋」及び「近代日本」という翻案された「西洋」との圧力的接触、咀嚼、自己化という過程を経てどのように自己の「近代」を実体化したのか、また20世紀後半以降、娯楽市場で現出したグローバル化現象によって、読み直される「近代」の表象について、東アジア間に存在する「大衆」「大衆演劇」「大衆娯楽」概念の相違と共有を探りつつ、社会変容を随時反映して時間的蓄積よりも更新を本質とする「大衆演劇」「大衆娯楽」から明らかにする。それにより、従来の「東アジア文化圏」研究が「西洋」出自の分析・理論を借用する傾向を有するために見えなかった当該文化圏の独自性に立脚した分析・理論を模索し、「東アジア文化圏」研究基盤の構築を目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[東アジア文化圏] [近代] [大衆娯楽]

研究【経過】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本共同研究は「東アジア文化圏」の娯楽市場における「近代」の表象を明らかにすべく、3年計画で研究活動を進めている。初年度(2018年度)、第2年度(2019年度)以下の3つの研究項目を設定している:

- 1) 「近代日本」空間に覆われる時間前・空間下時代の芸能を取り巻く環境と芸能の関係性
→ 見せるもの・見せ方の変容と諸要素の関係性
- 2) 「近代日本」空間から離れ、1980年代前半までの芸能を取り巻く環境と芸能の関係性
→ 媒体の多様化と「西洋」「非西洋」の枠組の変容の関係
- 3) 「東アジア文化圏」の枠組としての「非西洋」の機能
→ グローバル化現象によって読み直される実体化された自己の「近代」

メンバー(台湾・中国・韓国・日本の研究協力者を含む)個々が研究項目を選択して、研究対象を決め、自身の専門分野から研究活動を行い、それを共有して東アジア文化圏という視野の中に置きなおして読み直す。掘り下げた研究対象から抽出するものを、他との関係性から捉えなおすことで、人々の暮らし・嗜好の変化に合わせて変容する、すなわち「他」から様々な要素を吸収・消化して「自」とする大衆娯楽の諸芸能の内容・輪郭を把握することに務める。

第二年度は、研究会の開催が6月になったため、通信手段も用いて、初年度の活動で浮かび上がった各地域・国の「興行」の実態からみえる興行概念の相違から、最終目標に至る過程として、本共同研究のキーワードの1つともなる「興行」概念の共有化を図ることを目的に加えた。「大衆」を巡る概念同様、「興行」もどのような視点から眺めるかで現出するものは異なる。研究成果がひとつにまとまる仕組として、「関係性」という視点も共有して各自分担研究に努めた。

その中間成果報告として、9月に台北藝術大学戯劇学院、東亜大衆戯劇研究会、立教大学アジア地域研究所とともに、台湾・台北藝術大学で国際論壇「2019 東亜大衆戯劇研究国際論壇 面向大衆：戯劇視野、場域的建構與生成」(9月17・18日)を開催した。「関係性」という視点は、個々の研究対象自体に絞り込むだけでなく、その外的環境も視野に入れた研究をもたらした。メンバー各自の発表内容の概要は以下の通り:

社会との関係：**簡秀珍**(研究協力者)―社会観念の変容がもたらす芸能の視覚的表現の変化
行われる場との関係：**徐亜湘**(研究協力者)―租界・劇場のある空間の特殊性と初期話劇の

劇団・演じるものとの関係

宮信明―落語の場が寄席からホールに移行するに伴う有形無形の芸能・観客・属性への影響

属性との関係：**張啓豊**(研究協力者)―民俗範疇の要素を演劇に導入する方法とそれによりもたらされる変容

中野正昭―民俗芸能に始まり、職業化した大衆芸能の俄を事例に、素人芸の郷土芸能としての俄と全国レベルの知名度を誇る職業化した俄が併存する九州の歴史と現状

メディアとの関係：**森平崇文**―20世紀に登場したラジオに注目し、その演劇コンテンツと舞台との関係などを通じて演劇メディアとしてのラジオ放送

研究【経過】の概要 つづき

の歴史的意義の検討

輪島裕介—映画、レコード、演劇の各領域の産業構造とその変容という観点から美空ひばりの特異なキャリアを分析)

近代化と演劇：林子竝（研究協力者）—西洋演劇に学んで新しい日本の演劇を生み出そうという文脈から生まれた新国劇に焦点を当て、新聞小説の舞台化というそれまでになかった演目群、それを演じるために、どのような身体性を獲得したかなどを通じて、近代化の下で形成された大衆性のある演劇の特性を分析。

細井尚子—初代水谷八重子を事例に、日本の近代娯楽市場に形成された新劇と歌舞伎の間に位置した新派から、その内なる「西洋」「非西洋」を分析

国際論壇開催時には、共同研究メンバーに閉じた研究会を行い、意見交換を行った。互いの研究成果は、互いに新たな気付きを生み、芸態がどのような文脈のものかによって、また娯楽市場におけるハード（劇場）の管轄者・所有者と、ソフト（芸態）の制作・提供者との関係性によって多様性があるが、「興行」が芸態を商品コンテンツとして売買するシステムであること、また「興行」は娯楽市場のソフトではなく、ハードによって生み出されることを共有した。

国際論壇、研究会を経て、共同研究メンバー個々が自身の研究を再検討して発展させ、今年度の研究成果報告として、2019年12月14・15日に立教大学で国際シンポジウム「東アジア文化圏の芸態にみる『大衆』～観念・実体・空間～」を開催した（アジア地域研究所と共催）。当該国際シンポジウムの基調講演は、石婉舜氏に依頼した。石氏は台湾の近現代映画・演劇の研究者である。今回は石氏が近年大型プロジェクトで取り組んでいる台湾の大衆的な現代劇・映画に大きな功績を残した林搏秋の仕事に焦点を当て、彼が日本に留学し、新宿ムーランルージュで劇作家として歩みだし、東映の映画撮影のヘルプもした経験が、後の台湾での彼自身の仕事ばかりでなく、台湾の演劇・映画界にどのような影響をもたらしたのか。林搏秋以前の台湾の新劇の状況から始め、「大衆性」という語を巡って林搏秋の軌跡を映像も交えて紹介した。石氏の基調講演では、台湾がもつ言語の問題も指摘された。台湾語・中国語口語・日本語が併存し、日本統治時代に育った人々により、演劇界でも日本語が優位に立ち、その後中国語の時代になって発信・提供側の継続性に障害が生じたという。従来は無意識に提供者・需要者間に留めていた言語の問題を考え直す機会ともなった。

メンバーの研究は「劇場の作用」「メディアを超えて」「属性を巡って」「大衆性を巡って」の4つのセクションになったが（具体的な発表タイトルは「研究発表」欄参照）、興行・大衆・関係性を結節点に、全体としてゆるやかにまとまり、第二年度研究成果報告として、論文集を編んだ。

また研究成果の一般への公開・還元としては、2回の公開講演会（於立教大学・立教大学アジア地域研究所と共催。「レビューから見る宝塚歌劇」6/14、「石見神楽～神と人のエンタテインメント～」7/12）を開催し、国際論壇の付設企画として、台湾・台北藝術大学でワークショップ「石見神楽ワークショップ」を実施した（2019年9月17・18日）。学生に対しては正規授業科目として「大衆演劇の世界」（春学期）、「演芸の世界」（秋学期）（いずれも立教大学全学共通科目総合科目）を1回3コマ集中の開講形式で開講した。毎回研究者、実演者・関係者など3名で担当し、共同研究のメンバーが自身の研究成果を還元した。

※ この（様式2）に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 森平崇文「上海、京劇、早稲田：日本京劇迷菅原英次郎の青春」『梅蘭芳学刊 第三輯』学苑出版社（北京）、2020年1月、pp.99-124
- ② 細井尚子、春風社、『見る・見せるー中国四川・福建の表演にみる「演じる」こと・人・空間』2020年2月、393頁
今岡謙太郎・中川桂・宮信明・重藤暁、淡交社、『昭和の落語名人列伝』、2019年7月、328頁
- ③ **【公開講演会】**「レビューから見る宝塚歌劇」宝塚歌劇団演出家・草野旦氏（研究協力者）2019年6月14日、立教大学・「石見神楽ー神と人のエンターテインメントー」西村神楽社中・代表日高均氏（研究協力者）・細井尚子
【ワークショップ】石見神楽工作坊 2019年9月17・18日、台湾・台北藝術大学
西村神楽社中・代表日高均氏（研究協力者、細井尚子・「帝国日本と少女歌劇」2019年9月6日、京都大学、ディスカッサント輪島裕介、細井尚子
【国際論壇】「2019東亞大眾戲劇研究國際論壇 面向大眾：戲劇視野、場域的建構與生成」2019年9月17・18日、台湾・台北藝術大学
簡秀珍（研究協力者）「戲曲的互文性、「番」漢想像和觀演的性別意識--以《關西（沙）河》與《雙沙河》為例」・張啓豊（研究協力者）「戲曲編劇的民俗運用：以歌仔戲《余太君掛帥》為例」・中野正昭「佐賀俄にみる九州俄の伝統と職業化」・徐亜湘「孤島時期上海綠寶劇場の通俗話劇演出」・森平崇文「放送と戲曲：1950年代の上海を例に」・細井尚子「近代日本娛樂市場に現れた「西洋」と「非西洋」ー女優水谷八重子からみる諸芸態間の距離ー」・林子竝「大眾身體場域的形成；從『新聞小説』到『新國劇』」・輪島裕介「演じる歌手／歌う映画スターとしての美空ひばり」・宮信明「ホール落語の登場と落語の芸術化」
【国際シンポジウム】「日本演劇・映画人の＜台湾時代＞ー植民地舞台に見る文化的交錯ー」2019年11月13日、早稲田大学、コメンテーター細井尚子・「東アジア文化圏の芸態にみる『大衆』～觀念・実体・空間～」2019年12月14・15日、立教大学（発表の詳細は以下④当該シンポジウム論文集参照）
- ④ **【論文集】**細井尚子編著『東アジア文化圏の芸態にみる「大衆」～觀念・実体・空間～論文集』2020年3月、立教大学機関リポジトリ2020年4月1日公開（2020年度刊行予定）
石婉舜（研究協力者、台湾・清華大学・台湾文学研究所・副教授）**【基調講演】**「知識人と近代台灣的大眾娛樂市場-以林搏秋の戲劇、電影軌跡為中心的考察」pp.4-27・宮信明「ホール落語の定着と芸の変容――六代目三遊亭円生の昭和30年代――」pp.28-50・徐亜湘「小市民的高尚娛樂----孤島時期上海綠寶劇場的話劇演出（1938-1941）」pp.51-115・森平隆文「ラジオと芸能ー1950年代上海を例に」pp.116-135・輪島裕介「美空ひばりにおける「歌う時代劇スター」から「座長」への転身とその文化産業史意義」pp.136-150・簡秀珍（研究協力者、台湾・台北芸術大学・副教授）「臺灣亂彈戲《關西（沙）河》中の「番」漢想像和觀演的性別意識」pp.151-199・洪榮林（研究協力者、韓国・延世大学・公演芸術研究中心・研究員）「从1950年代乐剧和电影的結合狀況看出的后殖民和冷战」pp.200-238・中野正昭「筑紫美主子と佐賀にわか」pp.239-257・林子竝（研究協力者、台湾・台北芸術大学・副教授）「大眾演劇與日本戦後の戲劇情境～以鈴木忠志的『西哈諾』為例」（大衆演劇と日本演劇の戦後的な狀況；鈴木忠志の『シラノ』を例として）pp.258-308・細井尚子「『女優』『女役者』『女形』ー初代水谷八重子から見る近代日本娛樂市場ー」pp.309-355
【招待講演】細井尚子「胡撇的越境力～在20～21世紀的娛樂市場當中～」2019年10月19日、台湾・政治大学台湾文学研究所
【学会発表】宮信明、「Rakugo:Surviving the Meiji Restoration」、EAJSヨーロッパ日本研究協会日本会議、筑波大学、2019年9月15日
【小論】細井尚子「時間・空間の『絢交ぜ』を編み出す芸能文化」『ASSEMBLY』Vol.4 p.19
ロームシアター京都 令和元（2019）年10月